

特集「森会 発足～現在～将来」

森ものがたり100号記念特集として、発足時と現在の代表及びアカマツ林担当世話役の方々に、それぞれカブトムシの森とアカマツ林について過去、現在、未来にわたって語って頂きました。



＜1993年9月カブトムシの森＞

○古川哲郎（初代森会代表）

「わたしたちの12年の歩み」によると、カブトムシの森での作業が始まったのが1995年になっています。家族で誘われて“カブトムシの森を育てる会”に参加したのは96年度からです。最初の1年は残念ながら知りません。参加した年に“森を育てる会”が発足しました。96年度の活動内容は、飼育小屋整備1回、下草刈3回、苗床整備1回、堆肥床整備1回となっています。2000年頃までカブトムシの森での作業はクヌギの生長を助けるための下草刈がメインで、夏場の草刈は蒸し暑くて大変でした。それでも、膝丈まで伸びた草がさっぱりと刈り取られた作業後の景観の変化に感動し、汗を流した爽快感など充実感を覚えたものです。私は草いきれを感じることに特に好きです。My鎌を用意したり、鎌研ぎを教えてもらったり、ノコギリや熊手や背負子など、普段使わない道具を使う楽しみもありました。活動内容も増えてきました。多くの会員に参加してもらおうと草刈キャンプを企画しました。また、池をつくろう、草木染めをやろう、調査も必要、安全対策も必要などとレンジャーの指導のもと会員みんなでいろんな意見を出し合って活動内容を決めていきました。“うん・えー会”の

いいところだと思います。時間内だけでは飽き足らず、活動後に残った人でセンターやファミレスでやりたいことを話し合ったものです。森を育てながら私たちが育てられる、と会員が以前言った言葉です。皆様の継続した活動を期待致します。ありがとうございました。



＜2011年12月カブトムシの森＞

○鎌田隆（現森会代表）

私が入会した8年前、カブトムシの森は常緑樹の茂る雑木林。その後、除間伐が進められ、現在では明るく、林内が見渡せるようになりました。間伐を進めてきたことにより子供の腕ぐらいだったクヌギも今では幹回り40～50cm、樹高は15mに成長しています。今後は、みんなを見守ってくれる活動のシンボルとなるクヌギの大木を育てることと里山の環境を保全するために植物の管理を行います。森は以前に比べ、明るくなりましたがより多くのいきものを育むためには、徐間伐を継続し、現在より明るい森にすることと下草や実生苗を育てる必要があります。そのためどのような植物・昆虫が生息するのかを調査し、その結果を元に研究し、管理することで植物の多様性を図り、多種の生き物が生息する森を創ります。また、この森を観察資源として利用促進するため、遊歩道沿いの草刈を行い、森の中の見通しを確保し、昆虫や植物との接点作りを念頭に虫の目線で作業を行っています。生き物の生息環境の保全と観察施設としての利用を促進するためにバランスをとりながら管理作業を行います。現在、調査・研究中の昔の油山の姿を知ること地域との連携を図り、自然観察の森だけの活動

に留まらず、活動を地域に広げていくことも視野に入れて、活動を展開していきます。また、将来的には、来園者にいきものとのふれあいを深めてもらうために散策や観察、森での遊びをサポートすることも必要だと考えます。

○清水賢治（初代アカマツ林世話役）

1996年に森会担当だった中村レンジャーから話を伺ったことが始まりでした。非常に希少なアカマツ林が油山に残されていることを知り、アカマツ林についての勉強会を行ったこともあり、森会全体で、アカマツ林の希少性が認識され、アカマツ



<1998年11月>

林保全プロジェクトに繋がっていきました。当初の作業は、有志による森会オプション活動という位置づけで開始されました。97年の秋に、A・B両地区の植生調査を行い約40種類の植物を確認しました。その後、保全作業として、下草刈り、低木伐採、地かきを行い林床を整備しました。また、天然更新の可能性を探るため、実生を観察し、A地区は南側斜面からの日照が少ないせいか発芽してもすぐに枯れていることを確認しました。2000年には、A地区の実生の発芽率が悪いことから、A地区南側の斜面を管理区域に加え、A地区の日照を確保するため、数本の大木を除伐しました。私が担当している間で、一番大がかりな作業が大木の除伐でした。除伐する木を選び、木を切り倒す方向を決め、ロープをかけたのち、のこぎりにて切り倒し、その後運び出すためさらに短く切り、片付ける。全て手作業の上、急斜面での作業となりました。この時はヘルメット着用でした。私が担当していた間、作業計画を立て、それを森会のスケジュールにのせ皆さんと共に実行してきたわけですが、何より心掛けていたことは、作業をする会員の確保や、作業の進捗ではなく、その日の作業を無事に終えること

でした。活動を続けていくためには安全第一と考えていたからです。今後も森を見守り続けるため、細くとも長い活動が続きますように。

○迫盛寛（現アカマツ林世話役）

森を育てる会では観察センター横のアカマツ林を保全していくことを決め年7回程作業を行っています。松枯れが進むなか、手をこまねいていくわけにはいかず、大学の樹木保全の専門家等をお招きし、勉強をかさねて2006年にアカマツ林保全5



<2011年12月>

ケ年計画を策定、「アカマツ単林の方向で保全する」と方針を決めました。

遊歩道沿いの観察木（26本に名札を付けている）以外の常緑、落葉樹の伐採、落枝の除去、シダ等の草刈りを行い、徐々に園内は明るくなってきました。この間来園者のために看板も掲げ、階段等の補修、堆肥ヤード作りも行いました。放っておくと繁る草を暑い夏に刈るのは大変ですが終わった後きれいになっていると、達成感を味わえます。ただ注意しないと枯れた松を伐採した後は明るく陽がさすようになり、せっかく育ったアカマツの幼木を切ったりしかねません。7年位のアカマツの幼木は約1メートル近くに育っています。今後もマツノザイセンチュウによる被害木が減ることは考えられないので、アカマツの為に良いと思われる明るい森にすべく、アカマツ以外の樹木を伐採し、松葉かき、シダ及び草刈り等を地道に実施していきたい。来園者が1人でも多く訪れてくれるよう案内書を作成し、遊歩道が歩きやすいように、階段等も整備していこうと思っています。最後にこれだけ松枯れが進むと伐採により、幼木が育ちやすい環境になり、今後は世代交替も視野に入れ残っているアカマツも伐採の対象として検討すべきかとも考えています。